

I 序

今日は、拝読された第二テモテの4章の1節から5節までの箇所から「自分の務めを果たす」という説教題で語らせて頂きますが、自分の生きていること、死ぬこと、その中で自分の務めを心得ている人っていうのは、余りいませんね。何となくこう、と、と、とって生きている。で、私はね、16歳で献身したでしょ。そして周りで結構キラキラするようなね、頭のいいね、言葉もよくできる連中はいるんだけど、優秀な連中ほど消えていきましたね。神学校を出て牧師になる手前で駄目になったり、私と一緒に勉強した人なんて卒業すると同時に保険屋さんになっちゃった。今もそれやって。意外と献身してそして牧師先生なんて言われるようになった後、使命をと言うか、僕から見るとあれ墮落だよな一つて思うような人生でもね、僕より収入いい生活してるんですよ。「高橋さんいらっしゃい」って言うので行ってみると、豪邸に住んでたりして。別荘も持ってた。だから「自分の務めを果たす」という使命を本当に心得て、貧しくても、富んでも、病に倒れても、健康であっても、どんな状況の中であっても、それを貫き通すっていうことは、一つのキリスト者としての信仰の表現でもあるけれども、自分の使命って言うか、果たすべき務めを果たすということは中々自分の力だけではできないでしょうね。

私のこの今までの経験だと、そうなった時にはいつも、支えられ、支えられてきましたね。私の指導者なんか、ある時みんなの前で（その時20人ぐらいの伝道者がいたんですよ）、「高橋さんには迷惑かけたね」って言ったから、周りの人は、何言ってるんだ？っていう顔して。というのは、その指導者と一緒に働きながら、食べるおまんまのお金が届かないんですよ。高校生伝道なんて儲かりっこないでしょ。40人来てたって一人10円だからね献金が。一人一人献げた10円玉を数えるのは僕の趣味でね。ニタニタしながら数えたんですよ。そういう記録が今もねその事務所にあるんですよ。いやもうこれじゃ、食えなくなるって思うようなこと随分ありました。なんでこんなになっちゃったんだろうと言うストレスが。

II パウロの背景

4章が閉じられようとしている時、パウロは牢獄にいました。出たり入ったりしてたよね。そういう中でね、もうすごい寂しい思いをしてるんです。今まで一緒に苦労して、飯を食い、祈りをささげ、伝道してきた仲間のね、デマスという男がパウロを捨てて出て行った。「私を見捨てて」と、パウロはこの手紙の最後に書いています。そういうことを思い起こしながら、テモテに頼む、この強い言葉の中には“俺を捨てないでね”とかね、“俺はお前のためこんなに熱く祈ってことばを述べているんだから、お前も頑張ってくれよ”と言う祈りが、熱い思いが、込められてるんですね。「信じます」と言ってね本当にささげつくして最後まで全うする人というのは、厳しい厳しい試練を何回も乗り越えなければ「アーメン」という人生は難しいです。言うことはできますよ。クリスチャンぶって生きるって事は出来ますよ。でもパウロががテモテに対して語ってるよ

うに、このような生き方ができるかどうかは、正に戦いです。そういう背景がここにはあるんですね。

1節2節を見ると、僕はパウロのこのことばの中に、パウロが召された時の背景を思うんですね。パウロは、キリスト教徒と生まれたばかりの教会を目の敵にして潰そうとしていた張本人だったんです。キリスト者を弾圧するためにダマスコという街に行く途中、パウロは十字架に掛かって、死んで墓に葬られて後、三日目によみがえられたイエスと出会ったんですよ。これはもう消すことのできない彼の人生の大きな衝撃だった。その時のことばも彼は残してますね。その時彼は昔の名前で呼ばれ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」と言うイエスの声を聞いたのです。“わたしはお前を異邦人の使徒としてわたしの仕事のために選んだ。これがわたしがお前に与える使命である。どうぞ果たしてほしい”というイエスの願いと背景があります。若い牧師のテモテに、パウロはこう言うのです。「神のみ前で、また生きている人と死んだ人をさばかれるキリストの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」と。パウロ自身はこの手紙を書くまで、イエス様のみことばを、福音を、伝えるためにいろんなところを通って、もう晩年は、最晩年は牢屋ですから。だからこの手紙を書いている時は、もう本当に死を強く強く自覚している中でこれを書いています。

このパウロからの厳かな命令は、パウロ自身がイエス様から受けた命令でした。パウロは教会を迫害して、ユダヤ人のエリートとして、パリサイ人として指導者になりつつあったでしょうね。そういう中で、もう聖書に書いてあるから、それ以外考えられないですけど、突然のように、藪から棒に、イエス様がパウロに現れて弟子となさった。もう藪から棒ですよ。だから時には文句も言ったでしょう。イエス様あなたが私に現れてこんな使命を与えてくれたから私はこんな不自由な、こんな生活せざるを得なくなった責任をとってくださいよ、って祈ったんでしょうね。ちゃんとイエス様は最後まで責任とっておられる。そういう自分の今までの伝道者としての体験を込めて、テモテに、“イエス様は、今おられる。やがて御国を完成するために備えておられる。そのイエス様の前で、私がよみがえりのイエス様から受けた時と同じような命令を共に受けている者としてあなたに語るんですよ”って言うわけですね。だから真っ暗闇のどん底のどん底で、生きる使命が与えられましたね。それが彼の希望になりました。だから今がっかりしてる人いますか？ もうこんなじゃ生きていかれないや、と思ってる人いますか？ そしたらね、僕がいつも皆さんに言ってきたこと「落ちるところまで落ちなさい」。これ鬱の人に良く言う言葉です。落ち方が足りないんですよ。落ちるところまで落ちなさい。そこにイエス様がおられるんですよ。

Ⅲ 時が良くても悪くても

今の世の中、教会の外の人たちが皆さ迷っていて、面白くもないようなことを、みんながこれがいいと言って、テレビで騒いだりして。そんな価値観の中で生かされていると、皆さん、どうなんですか？ 今のこの時代これでいいと思ってるんですか？

同じ疑問をパウロは、テモテに、エペソの指導者として召されているテモテにぶつけているわけですね。パウロにとってイエス様は、現存されるお方です。死んだけれども生きておられる。しかもそのお方は再び現れ

て御国を完成させるお方です。僕はその信仰を 16 歳の時に受けてしまったんですよね。誰も信じられないようなこと、「高橋さん。イエス様は今日お出でになるかもしれないだから、それに備えて生きろ」って。お前が生きろよって、本当は言いたいんだけど、指導者にそういうこと言えないから、勝手ながらじっとその人の生活見てました。

パウロにとって、イエスという方は救い主として共におられる神様です。テモテに“どんなに苦勞してても、その苦勞に揉まれてる中に君の救い主がおられるんだよ”っていうことを伝えてるんですよ。だからパウロにとっても、テモテにとっても、伝道する牧師として奉仕する時のですね、動機は何かって言うと、“イエス様に生かされて生きている、だからイエス様に従う以外ない。”これです。観念じゃないんです。神学じゃないんです。哲学や教会の教えでもないんですよ。私は伝道者として召命をいただいた。お前もそうだよなって。だから何が自分の務めかって、お互いにみことばを宣べ伝えることだよなって、2 章の冒頭で言うわけでしょ。それは、時が良くても悪くても。これはもう高校時代から本当にいつもいつも考えてね、だってね伝道する時なんていい時なんてそんなないですよ。馬鹿にされるし、僕はもう高校生の時に牧師と呼ばれ、宣教師っていうあだ名が付けられて、結構もう、そういうこと開き直って聖書研究会作ったりしてましたね。だから自慢じゃないけどって自慢してんだけど、本当に高校時代から伝道して、その頃救われた子が、日本中に散ってるんですよ。北海道から沖縄まで。今でも交流があるんです。イエス様が生きて働いておられて、その働き人と一緒にイエス様が働く時に、必ず救われて聖なる実が結ばれているってことを言いたいのです。

IV 聖書の基準

こうして礼拝する者たちに対して、お示しくださっているイエス様の御心は、あなたの生き様を通して、生きているみことばを語る証し人となってほしい、証し人として生きてほしい、ということ。忍耐（これはキリスト者の心得のいろはのいですよ）忍耐を尽くして、絶えず教えながら、責め、この責めということば、とっても厳しいことばなんですけど、これはですね道徳的な退廃的な事柄がそこに表れていることに対して、はっきりとその善悪を言うことのできる人こそが、神様が召された伝道者ですよ、牧師ですよ、キリスト者ですよ、って言うことが込められていますね。もう今は、本当にこの日本の現状思う時に、善悪の基準がわからないですね。毎日出てくるニュースを見ていると、善悪の基準がないんですよ。ことを他の事にずらしてなんか分かんないのが政治っていうんですね。毎週講壇からみことばは語られて、“これは神様が祝福することです” “これは神様がお嫌いになってる、捨てるべきことです” っていう、その基準が教会にはあるけれども、それは聖書が基準だからですよ。イエスキリストが基準となっていてくださるからです。

戒めるってことば、これは譴責する、叱ることばですね。勧めるってこと、励ましたり奨励したり、これ大切ですよ。だから上手に勧め、叱ったり褒めたりできるような人こそが、教育者だって言われてますね。だから牧師や伝道者に教会の指導者に、戒めるっていうことと、それから譴責するということ、それに勧めるっていうこととの調和バランスが崩れていたら、キリスト者は造られませんか。キリスト者の成長はないですね。現状維持している人はこれから墮落していきだけですからね。

3 節 4 節を見てください。「というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれて行くよう

な時代になるからです」。作り話。私が献身した頃、ドイツの教会を中心にアメリカの教会もそれに汚染されて、作り話の神学、謂わば、聖書から外れた神学が蔓延しました。そしてそれがいわゆる僕たちのグループである福音派と呼ばれている人たち中にも、すごい勢いで入ってきました。それはキリスト者が耳障りのいい自分達の都合のいい考え方を選び取ろうとして、“ああ、こういう牧師を選んで、こういう牧師は辞めてもらう、と言うような。私が米国に何回か行ってた時、そういう場面に出会いましたね。執事の家泊めてもらったのですが、その執事が言うには、「今度来た時は、あの牧師はもういませんから。私たちはあの牧師に辞めてもらうことになっていますから」って。それが僕たちのグループの中で現実起こってました。皆さん今どうですか。牧師の説教聞きながら、自分の都合のいい説教だけ、自分の都合のいいように解釈して、そして生活してるんじゃないですか？ 牧師の方が墮落してね、信徒に好意を得ようとしてそれらしい言葉で終わっていたら、腐りますね。講壇から腐る。パウロは、“健全な教え、すなわち、みことば、聖書の基準からずれたことを公然と講壇から話す、そういう時代がデモテよ、来てるし、来るからね、お互い伝道者として気をつけなくちゃね” っていうことを言ってるわけですね。

V その務めを果たす

イザヤ書、エレミヤ書を、静かに、このコロナのおかげで読むことができましたね。心に深く預言者のことは、預言者のうめきが聞こえてきました。本当に贖われて、贖われて、救いを頂いいただくと知っていながら、分裂した北王国イスラエル、南王国ユダも、結局は多民族に汚染され、支配されて、攻撃されて、そしてバビロンという地域の捕囚として移されていく。国が崩壊していく。我々は神の民だと言って神殿まで造りながら、それは壊され、もうまるでどこがイスラエルなのかというような状況の中で、イザヤは語り続け、エレミヤは涙を流しながら、地獄のような苦しみをしながら、その務めを果たしているんですね。彼らに味方する者は一人もいない。イスラエルの民は、自分好みの指導者を、政治家を求めてそして結局国を失いました。イエス様の時代は正にそういう時代でしたね。ローマ帝国の支配の中で、エルサレムという街は、ピラトという男がローマ帝国の権力のもとに支配しているそういう中で、福音書を見ると、人々は、パリサイ人とかサドカイ人とか律法学者と共に、最終的にはイエスを十字架につけると、ピラトに要求するわけですね。そういう時代です。だからイエス様ただ一人、彼らを偽善者と呼び、「お前たちは白く塗られた墓だ。だからお前たちの心は腐敗している墓場のようだ」と言われたのです。皆さんあなたの心は大丈夫ですか？ 自分の都合のいいことしか考えてるんじゃないのかって言ってるんですよ。自分の都合のいい教会にしようとしたら災いですよ。あなたの心は大丈夫ですか？

57年間伝道者生活して参りましたがね、やっぱりいつも戦っていて、ストレスになっていることは、健全な教えに耐えられなくなった教会に集まってる人たちの言動を見た時、私はどうする。これはね今も続いている戦いです。

VI 真理とは

パウロは明確に4節で「真理から耳を背け」って。真理って言葉は聖書の中でとっても大切な重い言葉ですが、これはもう言うまでもなく皆さんすぐ分かりますね。真理って何ですかと聞いたら“イエスキリスト”

ですって聖書に書いてあるでしょ。もう教会学校のお友達の最初に出てくる言葉は正解ですよ。「神様」。でもそういう単純明快な信仰を今朝お持ちですか？ 真理にしたがって真理に基づいて今日礼拝者としてそこに座ってるんですか？ 自分の好みに基づいていない？ 真理とは、この66巻で括られた、聖書66巻のテーマです。すなわち、主イエスキリストです。“ここからテモテよずれないでくれよな”。どうですか、そうとう最近ずれてませんか、どこか。だからあの厳しいイエスのことばが黙示録にあります。「あなたは初めの愛から離れてしまった」。純真さが失われている。新鮮な信仰が今消えつつあるじゃないですか。だから慣れて怖いね。慣れは確かに力にはなるかもしれないけれど、その力によって腐敗墮落することは大きいね。私の周りで、本当にキラキラしてたけど、失ったのは、その人の能力、その人の持っていた財産、その人の色々な能力によってみんな消えていきました。一線から消えて、まあみんなが非キリスト教徒になったって意味でもないですよ。神学校を卒業して牧師になって、駄目になって、金儲けはできたけど、会社も起こし起こしたけれども駄目になったって人いますね。

57年間の中でどれほど見てきたか。あの嫌な言葉でね米国の人がよく使うスリーピングメンバーってことばですね、教会員なんだけど、クリスチャンなんだけど、もう眠っちゃって。まあなんでそういうキリスト者が起こされるかって言ったら、ま、怠惰、怠けるってこと以外の何ものでもないですね。パウロがテモテに語っているような、忍耐したり我慢したりしない、だらしが無いなっっていう生活がそこにあります。

Ⅶ きよく生きる（一粒の麦として）

だから真理に従って慎み深く生きるっていうことを、聖書は、きよい生活と言い、きよい人は、真理に基づいてちゃんと区別されている人、それを聖別っていうんですね。きよいということばの聖書概念は別たれるって事ですかね。パウロは“テモテよ、どうか、エペソの教会の奉仕者として、慎み深く真理に基づいて別たれたきよさをを保つ働き人になってくださいね”って。見てくれやかっさ良さではない、ことばのうまさではない、そんなことイエス様は見ても聞いてもいないんです、人の心に伝わらない。で、伝わるのはきよさです。

だから、イエス様のきよさと言うのは、父なる神様が負わされた十字架を最後まで負い切られたことです。磔になって殺された、その姿、そのイメージを、決して私たちは祈りの中で失ってはならないと思います。主イエスキリストの贖いですよ。それがきよいということ。だから十字架、ま、試練って言うてもいいですが、今それぞれみんな苦しみ持ってますよ。良かったと思うものが痛みになり、重荷になり、耐えがたいものになることだってあるわけですから。でもそれを手放さないで、放棄しないで、怠け者にならないで、し続けて最後まで追い続けて、追い続けたときに発見、あっ、賜物だったんだってね、私は賜物として頂いてるんだって。牧師の生活なんて正にそれですよ。パウロは、そういう生活を「私は自分が全てに捉えられているとは考えていません。なぜならこの一事に励んでいます。すなわち後ろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進んでいる」とその苦しみを受け止めて。なんだか分かんなくても受け止めながら一歩二歩、前に進んでその時になんだかなあ、慰められてるな、力を与えられたな、生かされている、ここにイエス様の道があったんだってことに気がついたりしますね。日本の教会史の流れを見る時に、福音が伝わってすぐ教会に起こったことは、迫害でしたね。それは厳しい迫害でしたね。それが僕の研究テーマに、高山右近になったんですけ

どもね。そういう殉教者が日本の戦国時代に起こされた。それが聖書のすごいテーマですけど、地に落ちて死んで滅びたようだけど、それが芽生えて新しいいのちを見た。一粒の麦だ。日本の教会は小さいんだけど一粒の麦としての力は、なお憐れみによって頂いています。そしてそういう武家社会が崩れて、そして新しい時代が、外国からの色んなことがあって、また福音が明治以降伝わるようになって、その時に日本が、日本人がイエス様に抵抗したのが、天皇の名のもとにお前達は無用だって、教会はなくてもいいという政策ですね。戦前はね、僕の子供の頃はまだ残っていた。国体って、天皇中心とした国造り。国体。ただ最近日本なんとか学会だって、国体に反する学者に公費を使わせていいのかなどと、もうこれ結局さくらやどっかの学園のようにならざるを得るんですね。そういう歴史があって、そして今の素晴らしい天皇陛下のそのおじいちゃんおばあちゃんたちの時代に天皇陛下の為にと言って死んでいったんですよ。「あんた牧師のくせに国政に背くのか、ちょっと来い」って、その時特高警察っていうのがあってね。今恐ろしく思うのは、特高警察のようなものが日本にもあるってこと。

私たちが一粒の麦として命をよみがえらせ、そういう使命が与えられているんだってことを、今日覚えましょう。すなわち善悪を判断する基準を私たちはみことばによって、イエスキリストによって、与えられているんだってことです。この国で今、日本で今一番必要な人は伝道者です。みことばを宣べ伝える人です。

憐れみ深き天の父なる神様この教会を憐れんでください。この教会の牧師を憐れんでください。信徒一人一人を憐れんでください。時が良くても悪くても福音に生き、福音を語り、誤解され弾圧され、捨てられても、イエスキリストに従う群れとさせてください。キリストイエスの尊い御名によってお祈りします。アーメン